

石頭禪師

令和2年9月第4週放送

せきとうきせんぜんじ 石頭希遷禪師は中国唐の時代の禅僧で、中国禅を確立したことで有名な大鑑慧能たいかんえのうぜんじ 禪師

のもとで仏法を学びました。しかし、修行半ばで師匠の慧能禪師は亡くなってしまいます。

石頭禪師が、慧能禪師臨終の際「これからは誰のもとで仏道を学べば良いのですか」と訊く

と、慧能禪師は「じんしこ尋思去」 「思いを尋ねなさい」と答えました。その答えを石頭禪師は「よく

よく考えなさい」との意味に受け止め、ひたすら坐禅に励みました。しかし、そこで坐禅ばかり

りをする石頭禪師の様子を心配した兄弟子の南嶽懷讓なんがくえじょうぜんじ 禪師が、「尋思去」とは同じく慧能

禪師のもとで修行し、故郷に帰って仏法を広めている青原行思せいげんぎようしぜんじ 禪師を尋ねなさいという

ことではないかと諭すのです。

慧能禪師の「尋思去」という言葉は「思いを尋ねなさい」つまり「よくよく考えなさい」と

いう意味でもありましたが、「思を尋ねなさい」つまり「行思のもとに行きなさい」というこ

とでもあったのです。石頭禪師はすぐに青原行思禪師を尋ねました。慧能禪師のもとで十分な

修行を積んでいた石頭禪師は、青原行思禪師と相まみえ、たちま 忽ちに悟ることとなったのです。

その後、石頭禪師は「尋思去」の意味を諭してくれた懷讓禪師など、慧能禪師のもとで共に

学んだ禅僧たちが集まる南嶽に赴き、大きな石の上に庵を結びました。寝る間を惜しんで石の

上で坐禅をするその姿から、石の頭、石頭禪師呼ばれるようになったそうです。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

そして、多くの弟子を育て信者を導き、

「^{こうざい}江西には^ば馬祖^{どういつ}道一、^{こなん}湖南には石頭希遷」とまで言われるようになりました。

私たち曹洞宗は、慧能禅師から青原禅師へ、そして青原禅師から石頭禅師へと伝えられた系統です。また、常日頃からお唱えしている『^{さんどうかい}参同契』というお経は、石頭禅師が著されたものです。石頭禅師は、曹洞宗にとって大変重要な禅師の一人であると言えるでしょう。

『参同契』というお経を真に理解することはとても難しいことですが、お経はこのように結ばれています・・・。

「^{つつし}謹んで^{さんげん}参玄の^{ひと}人に^{もう}白す、^{こういんむな}光陰^{わた}虚しく^{なか}度ること莫れ。」

簡単なことでは無いでしょうが、石頭希遷禅師の教えを今一度学びたいものです。

— 終 —